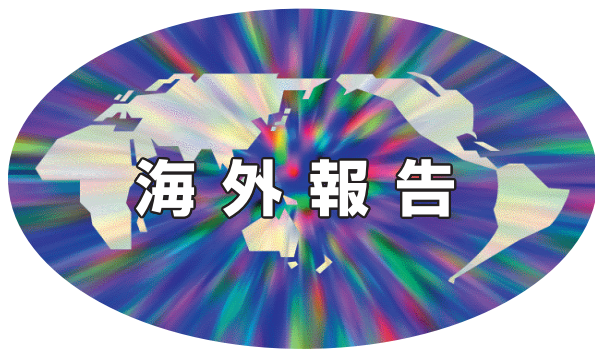




ベトナム・メコンデルタの カンキツグリーニング病 対策技術の開発・導入

ベトナム・メコンデルタ地域は、米の2期作や3期作で知られていますが、熱帯果樹の産地でもあります。果実の販売価格は米と比べ比較的高く、農家の収益確保に大きな役割を果たしています。

カンキツグリーニング病は、ミカンキジラミの媒介によってカンキツ類に発生する病害で、進行すると樹が徐々に衰弱し、果実の小型化や変形、収量低下を引き起こし、最終的には枯死してしまいます。ベトナムでの被害は90年代初めに10%以下だったものが、2000年代には80%程度にまで拡大したとみられています。これまでは罹病したカンキツ樹を伐採して焼却することが、周囲に広がることを防ぐ唯一の防除手段でした。そこで国際農林水産業研究センター(JIRCAS)では、「カンキツグリーニング病激発地におけるカンキツの持続的生産技術の確立」プロジェクトを2006年から開始し、この問題解決のための技術開発と現地実証に取り組んでいます。

カンキツグリーニング病の罹病を完全に防ぐ技術は今のところありません。ベトナムではカンキツ類は約2年で成木になり



写真/キングマンダリン

東北地域活性化研究チーム

関野幸二

SEKINO, Koji



ます。そこで育成期に病気への抵抗性の高い丈夫な樹を育て、できるだけ発病を遅らせ、その間に果実を収穫するというのがここでの技術開発のコンセプトになります。そのための技術は、感染していない健全な苗木の定植とその後のミカンキジラミの侵入・増殖の防止および抑制による総合防除管理です。しかし、この技術導入にはこれまで以上に費用がかかるため、経済性の検討が必要であり、私はこの新技術の経済性評価の課題を担当しています。これまで、14戸の新技術実証農家の経営調査と作業日誌記帳による技術評価のためのデータ入手を行ってきました。実証農家の園地はすでに収穫期に入り、慣行栽培体系より発病率は低下していることや農家間で差があるものの増収していることが確認できています。この成果を具体的数値で示すことが残された私の課題です。

TOPICS

平成22年度

雑草防除担当者研修の開催

日本植物調節剤研究協会(植調)東北支部との共催で開催している雑草防除担当者研修を、4月20日と21日の両日、大仙研究拠点にて実施しました。本研修は、水稻関係の除草剤適用性試験に必要な基礎知識と実技を試験担当者、特に初任者に修得してもらうことを主な目的としています。同時に試験担当場所、植調事務局、東北農研の3者間の連絡を密にし、適用性試験の円滑な実施を可能とすること、さらには地域の水田雑草問題への迅速な対応を可能とすることを考慮して開催しているものです。

研修プログラムは、初日は基礎編として、①東北地域における水田雑草問題の現状(荻原武雄;植調東北支部)、②水田雑草の分類と生態(中山壮一;東北農研)、③農薬登録のしくみと除草剤の分類(濱村謙史朗;植調技術部)、

④実験計画法とデータ解析の基礎(中山壮一;東北農研)について、2日目は実用編として、①適用性試験実施の方法(鶴谷明宇;植調古川試験地)、②試験

結果のとりまとめ(濱村謙史朗;植調技術部)についての講義の後、質疑・意見交換を行いました。

研修生は東北地域から6名の参加があり、このうち公立場所からの3名は本年度から新たに雑草防除試験を担当するとのことで、それぞれの講義後や意見交換の時間に熱心な質疑が交わされました。

このような研修は、東北地域以外にもいくつかの地域で実施されているとのことですが、公立場所に専門家が少ない雑草防除研究にあっては、除草剤の適用性試験ならびに雑草防除研究に関わるノウハウの継承に意義あるものと考えています。尚、私たちが実施してきた研修の重要性が広く認識された結果でしょうか、昨年度から同時期に全国の公立場所の担当者を対象とした同趣旨の研修会が植調研究所(牛久市)において開催されるようになりました。

(東北水田輪作研究チーム 中山壮一)

